
古の血

紅瞳 愁桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古の血

【Nコード】

N4469A

【作者名】

紅瞳 愁桜

【あらすじ】

ゼカミカ族の遺品である装飾品を探し旅をしている。ある街でゼカミカ族の血筋の少女を見つける。残念ながら既に親を失っているようだ。ゼカミカ族は絶滅寸前で、残っているのは俺だけである。しかし、同じゼカミカ族を見つけたことで希望が見えてきた。全ての遺品を見つけるまで俺らの旅は終わることはない。

序幕：廃墟

大都市の外れにある廃墟。

薄暗いこの廃墟には大都市からありとあらゆるものが捨てられている。

家具から人間まで不必要と認められたモノがその量すら分からないほど捨てられている。

捨てられたこの廃墟には当然、法はない。

強いものが勝ち弱いものが負ける、弱肉強食の土地である。

どんな手段を用いても最後に生き残った方が「正しい」のだ。

強さこそがこの廃墟では法である。

自分の持つてゐるすべての力を使っても生き残ることができるとは断言できない。

そんな世界だからこそ捨てられた人々は力強く生きているのだった。

二幕：疾風

捨てられたゴミの山のわきを通り抜け、薄暗い裏通りへ入った。

裏通りで耳を澄ますと微かに話し声のようなものが聞こえる。腰に差した刀に左手を添え、警戒しつつ声のする方へゆつくりと歩いていく。地面をおおってるゴミにつまずいたり、音を立てたりしないように慎重に。そのまま崩壊した高層ビルの横を曲がると人の姿を確認できた。ゆつくり物陰に隠れ、人影を観察する。

十メートルほど先によく肥えた中年の男と質素な服で身を包んだ十代ぐらいの若い女性が会話しているのが見えた。容姿から若い女性は無理矢理押さえて入るのを見た。容姿から若い女性は大都市の者と言ったのが分かった。

様子から見て、男はどうやら若い女性を買おうとしているようだ。しかし、若い女性にはその気がないのか取引は難航を示しているようだ。次第に男の方がイライラとし始め、口調が激しくなってきた。そんな男をきっぱりと断り、移動しようとした若い女性の手首を男がつかんで無理矢理押さえ込んでその上に乗り、勝ち誇ったような胸くそ悪い声で笑い始めた。流石にこのままでは若い女性が可哀想だ。そう思い、左手を刀に添えたまま一気に跳躍する。そして若い女性の服に手をかけた男のすぐ近くに着地し、着地と同時に残像が確認できるほどの速さで、空中で抜いた刀を横に薙いだ。骨を貫通する嫌な感触があったが無視し、刀を振り抜いた。すると頭を失った男は血の噴水を吹き上げながら、力無くその場に倒れ込んだ。血降りをし、刀を鞘に納めた。そして男の亡骸を蹴り飛ばすと、若い女性を助け起こした。

少々呆然とはしているが特に目立つケガはないようだ。だが、やはり廃墟の者だな。異常にやせ細っている。まあそれは良いとして先にアレを盗るか……。

思考を終了させて男の亡骸の方へ近付き、男のふところを探る。暫く探っていると、手に硬いものが当たった。ゆつくり、慎重に取

り出すと、それは小さな銀色の指輪であつた。複雑でどの言語にも属さない言葉が指輪中に刻まれている。

戦利品の指輪をゆつくりと自分の左人差し指にはめる。右人差し指にも同じような指輪をはめている。ようやくそろつたか。

ふと、女性を見ると、何かに取り憑かれたようにじつとこちらを見つめている瞳と視線が交わつた。眼があつても視線をそらすわけでもなく、じつとこちらを見つめている。

何となく視線をそらし辛いのでそのままにしていると、女性がその口を開けた。

「何か食べ物持つてない？」

一瞬、何を言われたか分からなかったが、意味をとらえ、ベルトに付けた小さい鞆を探る。しかし、あつたのは小さな飴玉一つだけ。これだけをあげても腹の足しにもならないだろう。ゆつくりと財布を取り出し、中身を確認した。

三幕：小休止

「はぐれるなよ」

折角警告しても全く聞く耳持たずのようだ。きよるきよるして今にも道に迷いそうである。買ってあげた薄い青色のワンピースを風になびかせながらスキップまでしてる。服は普通なのにもかかわらず、あまりに挙動不審なので周囲から視線を集めまくっている。もっとも、整った顔立ちであることも理由であると思うが……。

あまりに危なげなので女性の手首をつかみ目的の飲食店まで引張っていく。スキップは止めてくれたが、歌を口ずさみ始めた。思わずため息をつきながら、飲食店のドアを開けた。

「ところで、その指輪なんなの？」

口にスパゲッティを含んだままモゴモゴと女性が尋ねてきた。食べるか喋るかどちらかにしろよ、と心の中で思いつつ

「これは元々俺の種族のものなんだ。今はもう俺以外は殺されちまった種族だけだな。極東の島の種族の最後の忘れ形見ってコトだ」
「なるほどねー」

そう言いながら今度は餃子を口に運んでいる。何だか真面目に答えている自分が情けなくなってきた。とりあえず餃子を食べ終わって満足したのか箸を置き、こちらに身を乗り出してきた。

「ねえねえそれって魔法みたいなものが使えるものでしょ。他にないの？」

思わず、飲んでいた珈琲を吹き出しそうになる。

「な、なんで知っているんだ！」

「だって私、その字、さつき見えたもん」

笑いながら楽しそうに言った。しかし、見えただけではこの指はの特徴が分かるはずがない。もしかすると……。

「……君、この字が読めるのか？」

「君、じゃない。私には秋楓って名前があるんだから」

「オーケー。じゃあ秋楓はこの字が読めるんだね？」

「……うん、読めるよ」

少々不服そうに認めた秋楓をまじまじと見つめる。ここに刻まれている文字は古代グンパジ文字と言って、俺らの種族、つまりゼカミカ族で大昔に使われていた文字だ。この文字を読める者はゼカミカ族でもかなり限られた者だけだったはずだ。それを読めるということとは……。

「そうか、秋楓もゼカミカ族の者なのか」

「んー？ 何それ？」

「つまり俺と同じ民族ってコトだ」

「あーなるほどねー」

大して興味のなさそうな様子で返事をされたが、俺としてはかなり興味深いコトである。自分が最後の血だと思っていたが、生き残っていた血がいたワケである。しかも、聖血の方の血であるようだ。俺の体を巡っている賢血とは異なり、前線向きの血ではない。その代わり、生まれたときから古代グンパジ文字が読め、また操ることのできるまさに魔導師の様なタイプの血である。もっとも、攻撃向きの血なのか補助向き後であるかは分からないが……。

「……なあおい、秋楓」

「何？」

首をちよつと傾けながら、いつの間にか食べていたパフェを机においた。

「俺と一緒に旅に出ないか？」

「……告白？」

「……そんなワケあるか……」

「別にいいけどー。代わりに小遣いちょうだいね」

軽く答えた秋楓の様子から察するに、両親はすでに他界しているようだ。大都市の者ならばこつと簡単に同行を同意しないだろう。

だが俺という以上命を危険にさらす可能性がある。ならば……。

「これ、腕にはめとけ」

そう言っで、さきほどと同じ鞆から、銀色のブレスレットを取り出し、秋楓の右腕にはめた。ブレスレットには同じく複雑な文字、つまりグンパジ文字が刻まれてる。

「何これ？ えーつと『火の道標』？」

「名前はよく知らないが、炎属性の腕輪だ」

「わぁ、かわいい！ ありがとう」

「使い方は……」

「うん、大丈夫分かるから」

そう言いつつ秋楓は嬉しそうにブレスレットを眺めてる。これで少しは身を守れるだろう。

さて、と小さくつぶやき、次の注文をしようとしていた秋楓を無理矢理引つ張り、勘定を済まして店をあとにした。

四幕：雷霆

ゼカミカ族の装飾品を取り戻すべく、次の町へ移動する準備を整えに、あちらこちらの市場で買い物を済ませた。買ったものはもちろん、すべてあの鞆の中に入れる。この鞆にも、実はグンパジ文字が記されている。そのために、容量が無制限なのだ。

次の町へは、やはり廃墟を通っていくのがもっとも近いようだ。急がば回れという諺が、ゼカミカ族の言葉にもあったが、急ぐには近道を通るに限る。

そう思い、秋楓を連れ、再び廃墟へと入っていった。

歩き出して、早二時間。いい加減、同じような風景にも飽き、疲れてきた。ゴミで道が出来ているようなものなので、足場が不安定である。そのため、慎重に足場を選びつつ移動しなくてはならないので、よけいに体力を使ってしまう。

陽気に歩いていた秋楓も、疲れのため無口になり、足取りも重くなっている。そろそろ、休憩すべきだな。そう思い、適当な場所を探そうとあたりを見渡す。

ふと、目の端が鈍く光るものをとらえた。

それが何かを頭が認識するよりも早く、体が動いた。力強くがれきの山を蹴り、秋楓を抱きかかえ飛び去る。

すると、空気を裂く音と共に、何かが先ほどまで俺らがいたところへと飛んでいくのが見えた。音からして銃弾であろう。すぐさま弾の飛んできた方向を見る。しかし、すでにそこに人の気配はなく、何も見つけることができない。

「まずいな。秋楓、予想どおり敵襲だ」

「えー、休みたかったのにー」

「仕方ないだろ……。ちよっと待ってろ」

そういつて、不平をこぼす秋楓を残し、敵の行動の予測地点へと走った。

がれきの山の陰に身を潜め、こちらの同行をうかがおうとしていた青年の背後に舞い降り、腰に差していた刀を抜いて、青年ののど仏に刃先を当てた。確実に捕らえた、と思ったが瞬きをした隙に回避されていた。

地に伏せ銃口をこちらに向けている青年に追い打ちをかけようと、刀を返して振り下ろす。しかし、すでに構えていた敵の方が速く、銃弾の雨がこれでもかと言うほど、放たれた。何発かかすりつつも大半をはじき落とし、下から斬り上げる。今度こそしとめたと思っただ、苦し紛れに防御しようとした銃身にはじかれ、愛刀が遠く飛ばされてしまった。

とばされた刀を取りに行かせてもらえるほど敵さんは優しくないうた。こちらの武器がないことを好機と見たのか、近距離なものにもかかわらず乱射してきた。距離がないため、当然ほとんどの弾を躰で受け止めてしまった。

体中に激痛が走るが、それにかまっている暇はない。痛覚を一時的に遮断し、気を集中させる。

すると、両手の人差し指にはめた指輪の文字の部分が赤く光り出した。秋楓曰く『雷神の瞳』という指輪らしい。その名のとおり、雷属性の指輪ということだ。

赤く光る指輪に気がつき、あわてて青年がその場から離れようとする。しかし時すでに遅く、古代魔術の構築が完了した。それと同時に手を振り上げ青く光る指にさらに気を集中させる。

「解放」

静かに唱えると、指輪から青い光が放たれ、その光が全身を包み込むと同時に、躰中から青い電撃がほとばしり始めた。

青き稲妻を身にまとったまま、青年の懷に潜り込み、鳩尾を掌で強く打った。青年は電撃と衝撃により、断末魔をあげるまもなく吹き飛び、地に着いたときにはすでに炭化してしまっていた。

さてつと、小さくつぶやき、先ほどの場所へ戻って行く。しかし、そこには秋楓の姿がない。不思議に思い、当たりを見渡すが姿どころが移動した痕跡すらない。

どうしたのだろう、と思い眼で引き続き探していると、割と近くで轟音と共に火柱が天高く上がっているのが見えた。どうやら、秋楓が『炎の道標』を発動したようだ。しかし、流石は魔導師。初めての発動であれほどの威力を誇るのなら、熟練した後はどのくらいになるのか……。

何はともあれ秋楓が心配なので、煙がくすぶっている方向へと駆け足で行った。

終幕：旅立

崩れた家を飛び越え、着地したところは焼け野原になっていた。相当な炎が放出されたことが一目瞭然である。これでは骨どころか影すら残ってはいまい。文字通り蒸発してしまっているだろうなあ……。などと考えながらゆっくりと当たりを見渡して

「あ、居た」

すぐさまがれきの山の陰で気を失っている秋楓の元に駆け寄る。どうやら『炎の道標』の爆風に飛ばされたようだ。顔色も良いので大丈夫だろう。

鞆からよく冷えた水を取り出し秋楓の顔にかけると、文字どおり勢いよく目を覚ました。

「つ、冷たいっ！」

そう言っただけで騒いでいる秋楓に、これまた鞆からだしたタオルを渡しながらか、周囲の状況を観察した。

いくら秋楓の力が強大だと言っても、所詮戦闘に置いては素人なので、敵を倒し損ねているかもしれないからである。

しかし、敵の気配は全くなく、感覚を澄ましても何も感じ取れなかった。

どうやら『炎の道標』に完全に蒸発してしまったようだ。そう判断したところで落ち着いて秋楓を見る。

「よし、もう大丈夫だ」

そう言っただけで秋楓を抱き起こす。多少、混乱したままであるようだが、特に外傷はない。あの爆風に巻き込まれながら傷一つない。……全くどこまで強運なのだから……。

タオルを再び鞆に入れ、今度は離ればなれにならないように手を繋いだまま移動を再開した。

二人の旅はこれからも続く。

一族の遺品を求めて。

一族の思いを求めて。

当てはないが目的のある旅。

戦がその先に待っていていようと 突き進む。

お互いがお互いを支えて。

当てはなく 目的のある 二人の旅は 続く。

終幕：旅立（後書き）

長々とお読みくださり、誠にありがとうございます。

まだまだ未熟なので回を追うことに、どんどん上達していきたいと思えます。

それでは本当にありがとうございました^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4469a/>

古の血

2010年10月8日15時34分発行